

今回は蘇軾の「湖上に飲し、初め晴れて後雨降る」と、楊万里の「暁に浄慈寺を出づ」の二首を鑑賞しました。

蘇軾(1037～1101)は北宋時代、楊万里(1127～1206)は南宋時代に活躍した、いずれも宋代を代表する有名な詩人です。蘇軾は字を東坡(トンポー)と言います。中華料理にトンポーローという豚肉の角煮がありますが、蘇東坡がこのa料理を考案したことに因んでこの名前が付いたそうです。

22歳で科挙に合格、高級官僚となりますが、政治的には左遷に次ぐ左遷で恵まれない人生を送りました。一方、左遷のために各地を転々としたお陰で詩人としては素晴らしい作品を多数残しました。学者、書家としても有名です。また、左遷の先々で善政を施したこともよく知られています。特に左遷先の一つ、杭州は水害の多い土地でしたが、蘇軾が住民を動員して、沼地と化した西湖の湖底を浚渫し堤防を作らせ、一帯を肥沃な土地に変えたと伝えられています。それが後に中国随一の名勝地西湖となりました。西湖には今でも蘇軾が築いたと伝えられる「蘇堤」が残っています。

それはさておき「中国の文学は左遷のお陰と言っても過言ではないですね。」と植田先生。確かに中央に居続けたら、皇帝や他の官僚達との人間関係に戦々恐々として、自由な発想が生まれる余地はないように思います。左遷とはいえ、一度他郷の土を踏めば、初めて見る風景や新たな出逢いと別れに心を動かさざるを得ず、それこそが、文学が生まれる土壌なのでしょう。もちろん詩人としての才がなければどうにもなりません……。

さて、この詩の題名にある「湖上」とはその杭州の西湖です。「上有天堂、下有蘇杭」、つまり「天上に極楽あり、地上に蘇州、杭州あり」と言われた風光明媚なところですよ。その西湖に船を浮かべ、船の中で仲間を連れてお酒を飲んでいる、なんとも優雅な情景です。初め晴れ渡って太陽の光が湖面にキラキラと輝いていたかと思うと、突然にぼんやりとした霞に包まれて雨が降りだした。「いやいや、雨もまた良し。晴れも雨もどちらも絶景、素晴らしいものだ」と、作者は謳い上げます。あるいは口にこそ出ませんが、西湖をこんなにも美しい景勝地にしたのは正にこの私、という自負があったのかもしれませんが。

ここでさらに思いは過去に飛び、かつて春秋時代、この地で激しくしのぎを削った呉越の戦いに及びます。そこで越から呉王夫差に送られ、呉王の心を奪い尽して越を勝利に導いた絶世の美女西子を思い浮かべます。「あの傾国の美女はきっと薄化粧でも厚化粧でもどちらも美しかっただろうなあ、西湖が晴れでも雨でも美しいのと同じように……」と。ここでいう西子とは西施のことです。

西施の名は『史記』や『春秋左伝』という由緒正しい歴史書には登場せず、戦国時代の『莊子』のほか、後漢の時代に作られた『呉越春秋』等の野史の類に盛んに現われます。実在の人物かどうかは分かりませんが、眉を顰めて憂いを浮かべると一層美しかったということです。当時、呉王の宮殿では宮女達が西施を真似て、悲しくもないのに眉を顰めた表情をするのが流行ったそうです。他人を真似たり手本にすることを「～の顰に倣う」というのはこの故事に由来しています。



杭州西湖蘇堤と周辺景色（百度百科から）

この西湖と西施は切っても切れない縁でつながっていて、西湖は西子湖とも呼ばれるようです。この詩は遊び心と鮮やかな風景描写に歴史故事を絡めて、かつ平仄も押印も起承転結もバッチリ。最後の一文字は「宜」ですが、「ここまで来た時、蘇東坡も、してやったり!」と思ったでしょうね」と植田先生。植田先生ともなれば、詩人が詩を書き上げた時の心の内まで読めるのかなあ、と感嘆したのは私だけではなかったでしょう。ちなみに、この湖のことを「西子湖」と呼ぶようになったのはこの詩に由来するそうです。

さて、二首目は「暁に浄慈寺を出づ」。これも西湖を詠んだ非常に有名な作品だそうです。浄慈寺は、西湖周辺では靈隠寺と並び称される名刹です。その寺に宿泊して翌朝外に出た際、眼前に広がる西湖の風景を瞬時に捉えたものです。

先ず第一句は「何と云ってもやっぱり、西湖は六月が一番良い」と言い切っています。ここでの六月とは旧暦なので、七月のことになります。いわば夏の

盛りです。西湖はいつ見ても美しいが、この時期の景色は他の季節とは明らかに違う。蓮の葉が天の彼方にまで連なり、そこに朝陽をうけて映える蓮の花が格別に紅く美しい。果てしなく続く緑色と、そこそこに点在する紅色の対象が何とも言えない。

この詩は一瞬の風景を切り取り、恐らくかなり低い視点から、見たままに表現したもので、まるで絵か写真を見るようです。故事や謂れもなく、和歌や俳句に似た叙景的な作品に仕上がっています。「无穷碧」と「别样紅」の対句表現も見事です。

楊万里は剛直で情熱的、愛国的な政治家でもありましたが、詩風は日常的で、写実的です。きちっとして細かいところに味わいを見つける一方で、広大な風景も詠う。そんな特徴が見られます。日本人の感覚にはぴったりで、江戸時代の俳人たちにも愛誦されていたそうです。

楊万里は300年続いた宋の時代の中期、

yǐn hú shàng chū qīng hòu yǔ  
飲湖上初晴后雨  
sū shì  
苏轼

shuǐ guāng liàn yàn qīng fāng hào  
水光潋滟晴方好  
shān sè kōng mèng yǔ yì qí  
山色空蒙雨亦奇  
yù bǎ xī hú bǐ xī zǐ  
欲把西湖比西子  
dàn zhuāng nóng mǒ zǒng xiāng yí  
淡妆浓抹总相宜

こじょう いん は のちあめふ  
湖上に飲し、初め晴れて後雨る  
そしよく  
蘇軾

すいこうれんえん は まさ よ  
水光潋滟として晴れ方に好く  
さんしよくうもう また き  
山色空濛として雨も亦た奇なり  
せいこ と せいし くら  
西湖を把りて西子に比ぶれば  
たんじょうのうまつ す あいよろ  
淡粧濃抹総べて相宜し

xiǎo chū jìng cí sì  
晓出净慈寺

yáng wàn lǐ  
杨万里

bì jìng xī hú liù yuè zhōng  
毕竟西湖六月中  
fēng guāng bù yǔ sì shí tóng  
风光不与四时同  
jiē tiān lián yè wú qióng bì  
接天莲叶无穷碧  
yǐng rì hé huā bié yàng hóng  
映日荷花别样红

あかつき じよじじ い  
曉に浄慈寺を出づ

ようばんり  
楊万里

ひつきようせいこ ろくがつ うち  
畢竟西湖は六月の中  
ふうこうしじ  
风光四時と同じからず  
てんに せつする れんようきわ な みどり  
天に接する蓮葉窮り無く碧にして  
に映ずる 荷 花 別 様 に 紅 なり

1126年に北方の女真族<sup>じょしんぞく</sup>の侵攻により開封の都が陥落した翌年に生まれています。楊万里に限らず、この時代の詩人達の愛国精神は、そこから来ているようです。一方、都は杭州の地に移され、臨安と呼ばれて宋の臨時の都となりました。臨時といっても、この都の繁栄は、以後モンゴル族に滅ぼされるまで150年も続きます。これがいわゆる南宋です。これ以前の宋は後世、北宋と呼ばれるようになります。杭州が南宋の都になった後、西湖は皇族から庶民まで、共用の行楽地としてますます栄えました。南宋滅亡後この地を訪れたマルコポーロは、かの有名な『東方見聞録』で、杭州は世界で一番美しい都であったと称賛しています。戦わずして陥落した杭州には全盛期の繁栄の跡がそのまま残っていたようです。

全般的に宋の時代は軍事が弱かったのですが、その反面、経済が大いに栄え、その繁栄は南宋にも引き継がれました。平清盛がそれに目をつけ、日宋貿易を盛んに行ったことは、テレビドラマ等でもよく知られるところです。

毎回このように植田先生は詩人と歴史的背景を詳しくお話し下さいますので、一同は意味を把握した上で、情景を思い浮かべながら、原文で朗読を繰り返し、作品を味わいます。

ところで、日本の知識人も明治中期くらいまでは、中国語の会話こそできませんでしたが、中国人と同じように漢文の読み書きができたばかりで

なく、作詩もできました。西郷隆盛、大久保利通、高杉晋作、夏目漱石等は平仄も押韻も正しい漢詩を残しています。

しかし近代文学が興ると共に漢詩は次第に衰退していきます。「漢詩の衰退は時代の流れとして仕方ないかもしれないですがね、いま両国の外交官が漢文の読み書きができて、漢詩を交えた外交ができたなら素晴らしいでしょうね。」と植田先生。近代化による漢文の衰退は必然の流れだったかも知れませんが、今後はもう少し漢詩の力を盛り返しつつ、話せる会話もしていけたら、と中国語講師の私は思います。中国音による漢詩の朗読は、中国語の発音練習、特にリズム感の習得には最適です。それには、小学校から漢詩の時間が不可欠と常々思います。出来れば中国語読みで……。漢字で意味が通じあえる関係とは、考えてみれば世界広し、と雖も、日本と中国をおいて他にないのですから。

さて、筆者アラフォー女子が、漢詩の世界に浸るとき、もはや中国人とか日本人とかの国籍や民族性、そして時代をも超越して、一人の人間としての作者の感情を味わえることに心踊るのです。

出来ることなら、避けて通りたい人生の悲しみや絶望などマイナスの感情も、「味わう」ということにおいては、喜びや幸せと同じ価値なのだと、漸くこの年齢になって思い至るようになったからでしょうか。